

1. あなたの同族の者の牛または羊が迷っているのを見て、知らぬふりをしているはならない。あなたの同族の者のところへそれを必ず連れ戻さなければならない。
2. もし同族の者が近くの者でなく、あなたはその人を知らないなら、それを自分の家に連れて来て、同族の者が捜している間、あなたのところに置いて、それを彼に返しなさい。
3. 彼のろばについても同じようにしなければならない。彼の着物についても同じようにしなければならない。すべてあなたの同族の者がなくしたものを、あなたが見つけたなら、同じようにしなければならない。知らぬふりをしていることはできない。
4. あなたの同族の者のろば、または牛が道で倒れているのを見て、知らぬふりをしているはならない。必ず、その者を助けて、それを起こさなければならない。
5. 女は男の衣装を身に着けてはならない。また男は女の着物を着てはならない。すべてこのようなことをする者を、あなたの神、主は忌みきらわれる。
6. たまたまあなたが道で、木の上、または地面に鳥の巣を見つけ、それにひなか卵がはいついて、母鳥がひなまたは卵を抱いているなら、その母鳥を子といっしょに取ってはならない。
7. 必ず母鳥を去らせて、子を取らなければならない。それは、あなたがしあわせになり、長く生きるためである。
8. 新しい家を建てる時は、屋上に手すりをつけなさい。万一、だれかがそこから落ちて、あなたの家は血の罪を負うことがないために。
9. ぶどう畑に二種類の種を蒔いてはならない。あなたが蒔いた種、ぶどう畑の収穫が、みな汚れたものとならないために。
10. 牛とろばとを組にして耕してはならない。
11. 羊毛と亜麻糸とを混ぜて織った着物を着てはならない。
12. 身にまとう着物の四隅に、ふさを作らなければならない。

説教

申命記 22 章は、一見ばらばらな記述の寄せ集めに見えます。でも、人を人として大切にすることを教えるという意味では一貫しています。一つ一つは地味な規定ですが、人が神に祝福された幸いな人生を生きる上では大切な教えです。

1 節から 4 節では、「同族の者」の家畜が迷ったり倒れたりしているのを見た場合にどうするかを教えます。出エジプト記には、「同族の者」ではなく「敵」とあります。たとえ敵の家畜であっても、迷っていればもとの所有者のもとに返さなければならず、荷物の下敷きになっていけば「それを起こしてやりたくなくても、必ず彼といっしょに起こしてやらなければならない」と教えられました（出エジプト 23:4-5）。申命記では、「敵」より一般的に同じ共同体に属する「同族の者」と範囲を拡げます。「敵」以外のものなら猫ばばしていいわけではないということでしょうか。

ここで問題となっているのは、家畜のことより人間個人を尊重するということです。家畜は財産です。しかも生きた財産、動く財産です。迷ったり倒れたりします。それで、身近な「同族の者」の家畜が迷ったり倒れたりして

いるのを見た場合には、見て見ぬふりをせずに、迷うものは所有者のもとに連れ戻し、倒れていたら助けてあげなければならないと命じられています。家畜のみならず「着物」の場合にも、これを所有者に返せと言います。出エジプト記では家畜のことだけが言われましたが、申命記では「着物」という一般的で日常的な所有物にまで範囲を拡げます。どうせ自分のものではないのですから、他人の物を自分のものにして密かに売ってしまえば儲かります。家畜なら、倒れたまま見殺しにすることもできるし、迷っているのを捕まえて食べてしまえば誰にもわかりません。でも、そのような「見て見ぬふりをする」ことをここでは戒めているのです。「知らぬふりをしていてはならない」の直訳は、(1 節なら)「(さまよう牛や羊から)身を隠して見てはならない」です。目の前の問題から身を引いてそれには関わらない、下手に関わって責任を問われぬよう上手く振る舞う、わざわざ身を乗り出してまで人助けはしないというあり方を戒めているのです。家畜が迷い込んできたことで持ち主は困って血眼になって探しているかも知れないのですが、それを見て見ぬふりをして、「身を隠して」ただ冷たく眺めていることは許されないのです。「知らぬふりをしていてはならない」と再三にわたり強調されています(1,3,4)。私たちは自分中心で罪深いので面倒なことには関わりたくないからです。

律法がこう教えるのは、神ご自身がそのようにはなさない方だからです。神は、罪に苦しむ私たち罪人の悩みをただ眺めておられる方ではありませんでした。見て見ぬふりをして、苦しむ私たちの前から冷たく「身を隠し」ている方ではありません。神は憐れみ深い方です。ご自分の民イスラエルに御自身をあらわして、悩む彼らをエジプトから救い出されました。そして、その神は人となって世に現れます。救い主イエスさまは、神なのに人となって私たちの所に来て、悩む私たちを罪と滅びから救い出してくださったのです。

イエスさまは、良きサマリヤ人のたとえ話の中で、さらに踏み込んで、この問題を私たちの身近な問題に適用なさいました。ある男がエルサレムとエリコの間で強盗に襲われた時、祭司とレビ人は、それこそ「知らぬふりをして」行き倒れの人の横を通り過ぎます。これに対して、サマリヤ人は、彼らとは正反対に「知らぬふり」をせず、「身を隠す」ことをせずに、その反対に身を乗り出して、行き倒れの人を親身に介抱しました(ルカ 10:25-37)。これが申命記 22 章 1-4 節の教えの精神です。ここには十戒の「人を愛する」教えが生きています。第八戒「盗んではならない」とは、隣人の財産を隣人のものと積極的に認めて、相手に帰していくあり方を教えるものでした。相手の財産と尊厳とを積極的に認めて相手に帰していくよう努力する、そこに「人を愛する」あり方があります。それは別の表現で言えば、人を人として大切に作る生き方とも言うことができます。

5 節では、人が異性の服を着ることを禁じます。神は人を男と女とに造られました。神はわざわざ「男と女とに彼らを創造された」のです(創世記 1:27)。それは意味と目的があってそう造られたのであって、意味がなければそうはしません。男だけで充分です。それ故、神がそう造られたものを人は勝手に無視してはなりません。しかも、敢えてわざわざそれを倒錯させることは神への反逆です。いつの時代にも同性愛はありました。今日に於いても市民権を得つつあります。でも、聖書は同性愛を認めていません。同性愛は神の定めを覆すものです。まことの神を神ならぬものに取り換える倒錯をしているから、神は性の倒錯というさばきに引き渡されたのだ、後に使徒パウロはそう解説します(ローマ 1:24-27)。同性愛甚だしき当時のローマの罪状を厳しく断罪したのです。申命記が書かれた当時、カナン人の宗教の一つアシュタロテ崇拝では、礼拝する時に男性は女装をし、女性は男装をしました。偶像崇拝はまさに性の倒錯に直結していたのです。それで、次のように断罪します。「すべてこのようなことをする者を、あなたの神、主は忌みきらわれる。」(5)

6 節では、直接人間の話ではありませんが、人の幸福と長寿に関わることとして教えられています。たまたま道ばたで鳥の巣を見かけた場合、巣に雛か卵がいて母鳥がそれを抱いていたなら、「その母鳥と子を一緒に取ってはならない。必ず母鳥を去らせて、子を取らなければならない」と教えます。最も単純に理解して、見境なく母鳥も卵

や雛も取って食べてしまえば、翌日には卵を産む鳥がいなくなるわけですから、食べるに困ることになります。それで、「母鳥と子と一緒に取ってはならない」と命じられます。「あなたがしあわせになり、長く生きるためである」と言うのもその通りです。自分の食べる食糧の確保をよく考えて行動しないと、不幸になって長生きできません。この「あなたがしあわせになり、長く生きるためである」とは、十戒の第五戒「あなたの父と母を敬え」でも言われていたことでした（出エジプト 20:12, 申命記 5:16）。親も子も見境なく何でも一緒に食べることへの無神経さを戒めているのでしょう。それなら、「親子丼」は食べられない？かも知れません。いずれにせよ、親と子の区別、とりわけ親を尊重することを、「食べるにも飲むにも」何気ない最も身近な食生活でも心がけるべきで、そこに人が長く幸せに生きる秘訣があるということになります。これは環境保護の教えとも言えます。自然を治めることを委ねられた人間には、神のみこころに従って正しく自然を管理する責任があるのです。

8節では、家を新築する時には屋上に手すりをつけるよう教えられます。そうすれば「万一、だれかがそこから落ちて、あなたの家は血の罪を負うことがない」とその目的が明かされます。これもまた、人のいのちを大切にするための教えです。同時に、自分の過失責任を免れて、自分自身もまた長く幸せに生きることができるようになるといふ、幸いな教えなのです。

9節から11節は、ぶどう畑に二種類の種を蒔く、牛とろばを組にして耕す、羊毛と亜麻糸、混紡の着物を着ることを、それぞれ禁じます。そして、別種の種が混合すると「汚れたもの」となると言い(9)、神が造られたままの純粹な種を重んじ、それを保存する努力が教えられます。純粹さ、純潔を保つという努力は、先に見た性の倒錯(5)、後半の性の純潔の教え(13-30)にも見られます。神が造られたものがあたかも不十分であるかのように、思いのまま人為的に加工して新たなものを造り出そうとする人類の安易さに警告を發しています。神が造られた素朴で純粹なそのまものが何より最も美しくきよいのです。品種改良がすべて悪いということではないかも知れませんが、どんなに文明や科学が発達しても、神が造られたものが最も良い、聖書が教えるこの事実を今一度よく考えなければなりません。

「身にまとう着物の四隅に、ふさを作らなければならない。」(12) 着物の四隅の「ふさ」は、カナン人などとは区別された、イスラエルの衣服の特徴のようです。その意味は「あなたがたがそれを見て、主のすべての命令を思い起こし、それを行なうため、みだらなことをしてきた自分の心と目に従って歩まないようにするため」です（民数記 15:39）。これを見るたびに、自らが神に愛され召された神の聖なる民であることを思い出して、イスラエルは神と人を愛する律法を守り行うよう、励まされるのでした。